

テッポウユリの球根生産における摘花剤の利用について

(第1報) 摘花効果と収量におよぼす影響

小林 正 芳

(鹿児島県農業試験場)

KOBAYASHI, M.

The Effect of Bud Growth Retardant in Bulbs Culture of *Lilium longiflorum* THUNB.

(1) The effect of growth retardant and Yield.

鹿児島県のテッポウユリ球根生産地は大島郡和泊町、知名町からなる沖永良部島が産地で、昭和44年度の生産面積は 380haで、わが国の生産量の殆んどを占め、2800万球を生産し、そのうち 900万球が輸出されているが、面積の拡大にともなって、労力の不足が目立ち、その節減の手段として機械利用のほかに摘花作業の省力化があげられる。慣行摘花法は2.5~3.0cmぐらいのときが作業がしやすく、また球の肥大にも影響がないといわれているので、その時期の再検討と薬剤による摘花法を沖永良部島の現地で調査した。

1. 試験方法

(第1試験) つぼみの大きさ別摘花試験

つぼみの大きさが 0.5cm, 1.0cm, 2.0cm, 3.0cm, 開花時に摘花した区と対照区として開花放任区を設けて球の肥大を調査した。

なお、本試験の供試球の規格は10cm球を使用し、10月14日定植、収穫は6月4日である。

(第2試験) 摘花剤利用試験

摘花剤 K A 2806と2813を用いて摘花効果と収量を調査した、K A 2896と K A 2813の 1%液と0.5%液を噴霧機で茎に流れ落ちる程度散布した。

2. 結果および考察

(第1試験)

つぼみの大きさ別に摘花してその収穫球を調査した結果が第1表である。

本試験ではできるだけ早い方が球の肥大によい結果を得た。生産割合の多い規格は16~22cm球で、つぼみの小さいときに摘花した方が多くなり、早期摘花の悪影響はみとめられない。このことは薬剤処理の場合、幼蕾が摘花効果が高いので好都合である。

第1表 収穫球の規格別割合

規格 (球周) 区	14cm	14~	15~	16~	18~	20~	22~	16~
	以下	15cm	16cm	18cm	20cm	22cm	25cm	22cm計
0.5cmで摘花	4%	2%	7%	35%	28%	20%	4%	83%
1.0cmで摘花	5	4	7	40.5	34	9.5	—	84
2.0cmで摘花	2	9	15	33	34	7	—	74
3.0cmで摘花	2	12	17	32	31	6	—	69
開花時摘花	4	21	19	37	17	2	—	56
放任	5	23	23	28	21	—	—	49

(第2試験)

K A 2806と K A 2813の 1%と 0.5%液を散布した結果、K A 2813の 1%液散布区が完全に花飛ばし効果がみられた。

第2表 摘花効果

区	薬害の有無	処理時の着長	完全花	50株当りの開花数
			飛び率	
K A 2806— 0.5%	無	1~2 ^{cm}	0%	312
— 1.0%	無	1~2	0	300
K A 2813— 0.5%	無	1~2	56	165
— 1.0%	無	1~2	100	0
慣行手摘み	—	3	—	308

第3表 収穫調査 ※花飛びした個体

区	草丈 ^{cm}	葉数 ^枚	葉長 ^{cm}	葉巾 ^{cm}	球重 ^g	球周 ^{cm}
K A 2806—0.5%	58.6	109	11.8	2.0	121.0	23.0
—1.0%	54.4	106	12.2	2.1	120.8	22.6
K A 2813—0.5%	45.0 [*]	106 [*]	12.1 [*]	2.0 [*]	130.0 [*]	23.0 [*]
—1.0%	44.4	111.4	12.0	1.9	124.1	24.3
慣行手摘み	57.0	104.6	12.0	2.2	132.4	22.9

収穫時の調査でも K A 2813の 1%液散布による摘花株は、球周も大きく収量に特に問題はないようである。早期摘花のため球は肥大しているが、草丈は節間伸長がとまったため短くなっている。